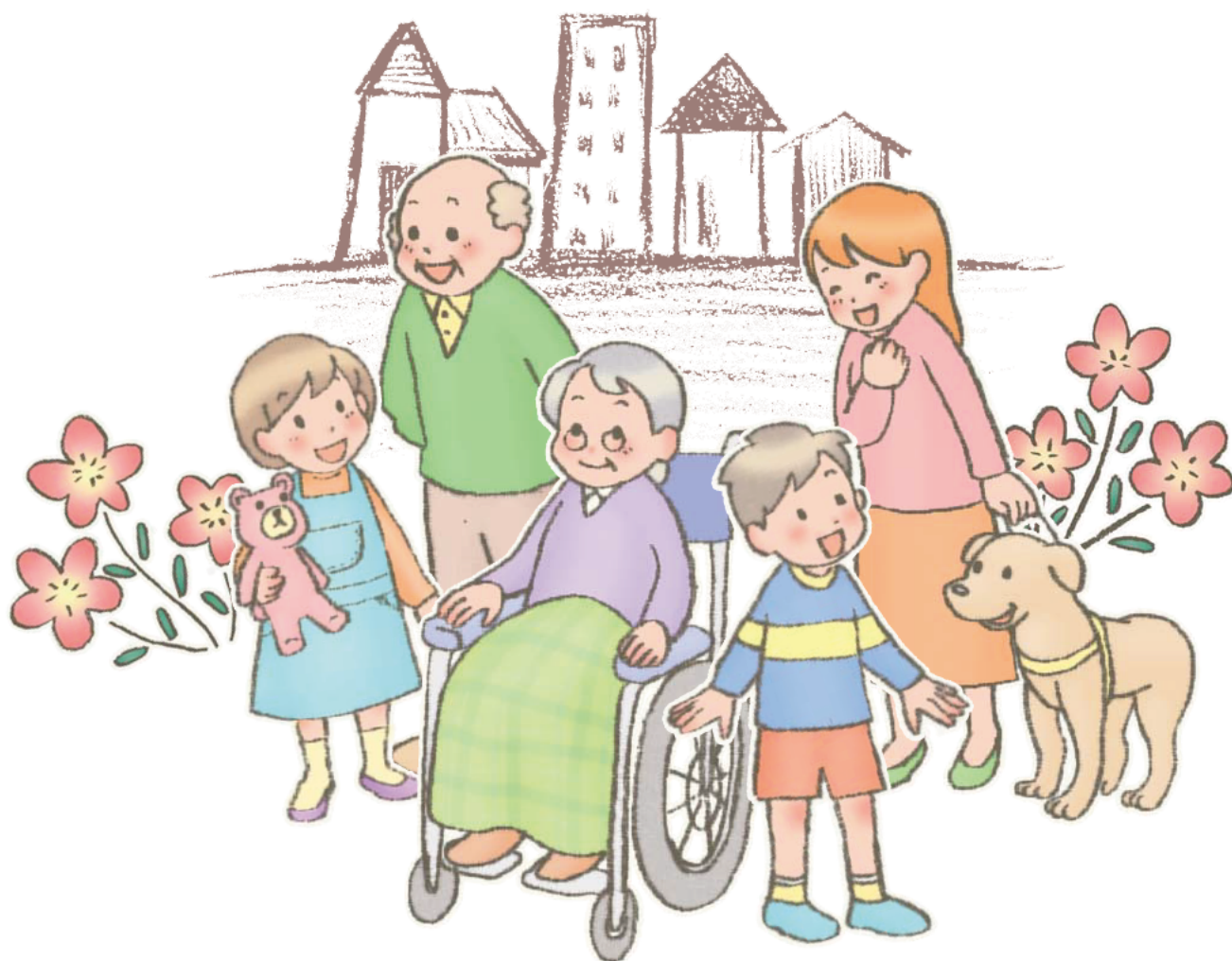


福祉の学習のための
障がい(児)者・高齢者との
コミュニケーション
のポイント



現代における社会問題の多くは、コミュニケーション不在の状態がもたらしたものであるかもしれません。家族関係の希薄化、核家族化、無縁社会といわれる状況のなかで、障がい(児)者・高齢者の社会参加などからコミュニケーションスキルの向上は、どの世代においても、あるいはあらゆる社会関係の中において必要不可欠なものになってきています。特に、教育現場において、児童、生徒の成長期に合わせたコミュニケーション力の向上をめざし、このパンフレットを作成しました。

コミュニケーション力を 高めていくために



■「コミュニケーション」とは？

用語解説によれば「意思及び情報の伝達」という意味に使われています。福祉の現場では「双方向の伝達と理解」というに置き換えて考えられています。つまり、それぞれの意思や情報について、共有化された状態および的確な伝達をめざしているということです。

■情報が共有化された状態とは？

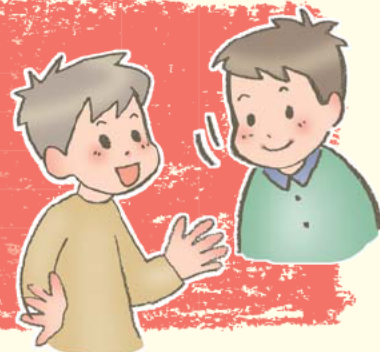
コミュニケーションが取れているという状態は、上図のように意思や、情報を発信するものと受信するものとの間に共有部分を持っているということです。一方的伝達や指示をコミュニケーションとは言いません。子どもたちと親、職場の関係、地域社会、障がい(児)者との係わりなどなど双方向の理解と意思があつてこそコミュニケーションが取れているといえるでしょう。言葉を変えて言うならば、発信者の主体性を受け止めつつ、どのように自己との融合を図っていくか、あるいは自発的意思や情報発信を行なっていくか、そのスキルが問われている課題といえるでしょう。



福祉の学習では、障がい(児)者、高齢者などへの交流や配慮などについて学んでいきますが、その基本となるのがコミュニケーションです。人と人との係わりが自然とできる、相手への気遣いがある、相手の人も気がねなく喜んでくれる。自分の思いだけでは相手の方の心に伝わらないことを学習していきます。

例えばこのような場合

障がい者の方が「今日は、雪が降って大変だった。」と言われたのに対して、「雪遊びが面白かった。」と受け答えたら障がい者の方はどのように思うでしょうか。「雪が降って大変だった。」という思いには何も応えていません。このやり取りには、発信者にも受信者にも問題があります。発信者の「雪が降って大変だった」の理由を省略したために起きたすれ違いです。「雪が降ったために、買い物に行けなかった」と理由を明確にしていれば、違った受け答えができたのではないのでしょうか。



■コミュニケーションに伴う3つの行動とは？

- ① 言葉による伝え合い
- ② 言語によらない伝え合い 表情、目線、姿勢、声の調子、距離間、手や体の動き
- ③ 特に深い意味を持たないが、信頼感や、そばにいて欲しい様子

言葉によるコミュニケーションが主となりがちですが、親しみの度合い、信頼感、安心感などにより、言葉による伝え合いから、他の行動へと重みが変わってきます。「何かを話さなければ不安」という状況から、「そばにいてくれることが安心」というようになります。このような気持ちの変化を互いに汲み取りながら、コミュニケーションの質が変化していくのです。



「自分を認めて欲しい」という気持ちは子どもたちも、そして高齢者も障がい(児)者も同じです。高齢であることや、障がいについて学習するよりも、その人が何を求めているか、どのように生きたいと願っているかを知ることが大切です。

私たちにとって辛いことは、周囲の無関心さや特別な目で見られることです。

ある障がい児が、重度心身障がい児の施設から、家庭復帰、普通学級への転校を希望しました。関係者は、受け入れのためにどのような環境整備が必要かを熱心に話し合いました。しかし、その子がなぜそのように願ったか、その思いをどのように達成するかについては議題として取り上げられませんでした。その子の願いは、家族と障がい児の世界しか知らないことから、**「普通の友達が欲しい」**ということでした。結局、関わったのはボランティアや地域の大人だったのです。



「自己決定する気持ち」を大切にする。

身体的な能力が私たちと違うと感じてはいないでしょうか。高齢者や障がい(児)者がいつも手助けが必要というわけではありません。それぞれの今の力を発揮したいと願っています。「何か手伝えることは？」という言葉のやり取りよりも、「〇〇さんはどうしたい？」と聞く気持ちを育てて生きたいものです。前者はできないと思い込んでいるときに使われますが、後者は対等の関係といえるでしょう。疾病の程度に関わらず、自分の気持ちを外に向かって発信したいと、さらにそれを受け止めてほしいという気持ちは誰にでもあるのです。



「相手の言いたいことをいったん受け止める気持ち」が必要です。

いつも、自己主張を繰り返していてもコミュニケーションは成り立っていきません。「今、〇〇さんが言いたかったことは……」と確認しながら話を進める習慣を身につけさせることが必要になってきます。伝えるほうは、自分の思いが相手の人は分かってくれたのだろうか？「分かってくれた。」

「もう少し、説明が必要かな？」

という目安になりますし、聞くほうも真剣にならないと確認することができません。習慣になると以外に楽にできるようになってきます。よく理解できなかった場合は、「もう少し、教えてくれる？」と尋ねるようにしてみてもどうでしょうか。

子どもたちの コミュニケーション体験プログラムを 紹介します

1

車いすの子どもも含めて皆で、できる遊びを考える(グループ4~6名)
1時間のプログラムです。

2

このプログラムの目的は、コミュニケーションスキルの向上であり、「遊び」
を決めることではないことを周知する。

○子どもたちとする約束事

- (1) 自由な発言。
- (2) 全員が発言する。
- (3) ○○さんの話は、ここがよかったと評価をしてから、
自分の発言をする。
- (4) 相手の話を否定しない。
- (5) グループでの意思決定を行うが、自分の意見以外でよかったと思える遊びを選択する。



3

実際に実行するために必要な準備について話し合う

- (1) 車いすの人に対する配慮。車いすの人が出来ること。
- (2) 全員の役割分担。
- (3) 場所、時間、用具等。



4

振り返り

- (1) 自分の意見に感想をもらった時にどう感じたか。
- (2) 人の話をきちんと聴けたか。自分の意見にこだわって
いたかなかったか振り返って見ましょう。
車いすの人のことをきちんと考えられたかどうか。
- (3) 聞く、訊く、聴くの違いについて説明します。



コミュニケーションは、自分の存在や価値観を相手に伝えること、受け止めてくれる人がいることで成立すること
を学びます。高齢者や障がい(児)者も、自分を理解して欲しいと願っています。特別な存在としてではなく、一
緒に考えてくれる仲間としてです。人が希望をなくするのは、病気や恒例によるものではなく、周囲の輪に入れな
い自分を感じたときです。互いに受け入れあう存在として認め合うことからコミュニ
ケーションが成り立っていくことを話し合いを通して感じあうことが大切です。

もう一つ、配慮しなければならないのは、人それぞれに考え方が違うということ
を理解させることです。親と子、子どもと教師、子ども同士、子どもと高齢者や障がい
(児)者。皆感じ方や発言に違いがあります。その違いの中に共通する思いを見出し
ていく作業がコミュニケーションを図るということです。



社会福祉法人 北海道社会福祉協議会
北海道ボランティア・市民活動センター
〒060-0002 北海道札幌市中央区北2条西7丁目
北海道社会福祉総合センター2F
Tel 011-271-0683 Fax 011-271-3956
mail: d-vola@dosyakyo.or.jp

